中学校二年の部　佳作　――――――　対象作品／冬野夜空著『一瞬を生きる君を、僕は永遠に忘れない。』スターツ出版

彼女のように

弘前市立南中学校　相馬一護

「君を私の専属のカメラマンに任命します」

この一言が、一人の男の子を大きく変えた。

あることをきっかけに、クラスの人気者の綾部香織と、正反対といってもいい性格の天野輝彦の、カメラマンとモデルという関係が始まった。常に笑顔を絶やさない香織に振り回される輝彦だったが、ある時、香織が笑顔の裏で重い血液の病気と闘っていたことを知る。それを知った輝彦の決意。たった二ヵ月間の苦しくて切なく、でも、美しい二人の物語だ。

読もうと思ったきっかけは単純なもので、カバーイラストがきれい、という理由だけだった。しかし、読み進めていくと、二人の究極の純愛があった。読み終えた後には涙が止まらず、手に取ったときのようにカバーイラストとタイトルを見てみると、彼女の表情やタイトルに全ての感情や想いが詰まっているなとすごく感じて、そこでも涙が止まらなくなった。この物語で、僕は香織が重い病気と闘っていることを知ってからの、輝彦の決意に胸を打たれた。「僕は最高の写真を撮りたい。病気を受け入れた上で笑っているものではなくて、君が心から笑っている写真を撮りたいと思ったんだ。」という輝彦の決意の表れがあふれ出た言葉に感銘を受けた。他にも、好きなシーン、言葉が数え切れないほどある。その中でも、「私も、君に撮ってほしい。」という香織の言葉が好きだ。生きる気力さえ失ってしまいそうな中で、最後に撮った彼女の写真。そのシーンを想像するたびに、人の命とは儚（はかな）く、美しいものだと思える。

この物語の素晴らしいところは、輝彦の変化だ。はじめは、嫌々撮っていた輝彦が、香織の病気をきっかけに、香織のことを自ら撮ろうとし、知ろうとする。そんな姿が、僕にはかっこよく思えた。

香織から、輝彦へあてた手紙がある。その手紙には、香織の輝彦へ対する本当の想いが詰まっていた。「本当は君の恋人になりたかった。本当は君ともっといろんなことをしたかった。本当は君ともっと生きていきたかった。」たったの三

文に、僕は心から感動した。彼女の手紙には、「君」という言葉が多く使われている。これには、君のことしか見ていないよという、彼女のひそかな想いだったのではないだろうかと考えた。手紙の中の一つ一つの言葉にも、たくさんの意味があると分かったときには鳥肌が止まらなかった。

輝彦のように、彼女のために泣いてくれるのは、きっと、彼も彼女を想っていたからだと思う。彼女との時間が楽しいと思えば思うほど、亡くなったときには悲しくなってくるものだと思う。それは、彼女も人に想われる、愛される人だったからだとも思う。僕は、そんな彼女を心から尊敬している。辛いときでも、笑顔で誰からも好かれていた彼女のこと。でも、時折見せる儚げな表情。彼女の本当の気持ち。今や、尊敬と言うよりもっと大きな感情なのかもしれない。

僕はこの本を読んで、人を愛し、人に愛されるような人になりたいと強く思った。そのために、彼女のように誰にでも優しく接していけるようになりたい。どんなに苦しくても辛くても、最後まで笑顔でいられるような人になりたい。どんなに辛くても最後まで笑顔だった彼女のように。